

大澤 聡の対談シリーズ

「対話するいきもの」

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授

樋野 興夫

Okio Hino

第①回 「医療維新に求められる対話学」

気鋭の批評家・大澤聡がホストとなり、各界の専門家や表現者たちと「対話」をテーマに「対話」を重ねる新連載。第一回のゲストは「がん哲学外来」創設者である樋野興夫。

がん患者やその家族とじっくり対話するがん哲学外来は、二〇〇八年の創設以来、全国各地に広まっていき、いまや八〇以上の拠点をもち、年間数百人の患者らの悩みを耳を傾け続けてきた樋野にとって「対話」とはなにか。大澤が問う。

医療維新の時代

大澤 ご専門は病理学ですね。

樋野 はい。だから、あまり生きた人間を診たことがなかった（笑）。

大澤 しゃべるのが得意ではないとご著書のなかで書かれていて意外でした。まさに「対話」のプロジェクトを立ち上げた当人なのに……。

樋野 今でも臨床医として話すのは

苦手ですよ。がん哲学外来では医者

としてではなく人間として話をします。診察ではない。だから不思議と話せる。

大澤 あの形式は先生としても気が楽というわけですね。

樋野 お茶を飲むだけだから（笑）。

大澤 患者や家族には、その脱力感

こそがかえって効力をもったと。

樋野 セカンドオピニオンを求めて

彷徨う「ドクターショッピング」を

続けている人たちも来ますよ。がん哲学外来は他所と違う雰囲気なのかもしれません。

大澤 先生ががん哲学外来をスタートさせるまでは、そういう場所がなかったんでしょうか。

樋野 今は病院外でもいるんな人が

やっていますが、あの当時はなかった。がん哲学外来は二〇〇五年に構

想したのですが、「がん相談」とい

う言葉もあまり聞きませんでした。

二〇〇六年にがん対策基本法が成立し、全国にがん診療連携拠点病院が設置されるなどします。大学もがん哲学外来だつたらやってよいと言う。時代の流れが背中を押した感覚です。今なら無理だったでしょうね。

大澤 そこで、「哲学」という言葉を選んだのはなぜなのでしょう。イレギュラーなネーミングですね。



批評家の大澤聡(左)とがん哲学外来創設者の樋野興夫(右)

樋野 「がん相談」や「がんサロン」

だと、相談にのつてあげますとか傾聴しますとか、いわゆる「上から目線」になりますよね。そうではなくて、同じ人間として同じ目線で対話したい。「がん哲学」という言葉なら、みんなわけがわからないから、結果的に同じ目線になる。

大澤 「哲学」と掲げると小難しそうで、かえってとっつきにくく感じる患者さんもあると思うのですが。

樋野 とっつきにくいところがいい。

がん患者は簡単に相談にのつてもら

うのが嫌なんです。その点、がん

哲学は先生も患者も意味がわかって

いない。だから同じ目線に立てる。

大澤 なるほど。

樋野 その後、がん哲学は当初の構

想を超えて広がっていきました。

大澤 患者をサポートする態勢はこ

の一〇年で全国的にがらつと変わ

りましたね。

樋野 まさに医療維新。

大澤 後代の人間の視点から見た場

合、医療のパラダイムチェンジが進

行する時代を私たちは生きているの

かもしれません。

樋野 ペリー来航から明治改元まで

一五年かかっています。今はいわば

公武合体の時代に相当する。という

ことは勝海舟が出てこないね。

大澤 その心は。

樋野 医療者は馬上から花を見て、

世間の人たちと同じ目線で花を見て

いない。医療維新、いまだきたらず。

大澤 変革の途上であると。

樋野 医療維新の目的は患者すべて

の必要に応えることです。その意味

では現在は医療者中心の医療になっ

てしまっている。

大澤 その「同じ目線」が対話を要

請するのでしよう。樋野先生をお招

きしたのは、ご著書のなかの「対話

の場」というフレーズに僕が反応し

たからなのですが、先生にとつての

「対話」とはなんなのか、この問題

を解きほぐす方向で今日の対話を進

められたらと思います。

「いいね」社会の行方

大澤 患者の方々は日常会話をす

るのですか。世間話というか。

樋野 私も何を話していいのかよく

わかっていないんですよ。

大澤 えっ。

樋野 人によっては何を言っている

のかわからないはず。でも、「いいね」

と言う人と、「わけがわからない」

と言う人とが、半々くらいのことを

やらなければダメなんです。

大澤 それは維新の条件でもある。

樋野 大澤さんも大学の先生だから

教育を例にとると、大学は今、学生

の評価ばかり気にしていますね。け

れど、そんなのは無視すればいい。

半分は「いいね」と思う学生、半分

は「わけがわからない」と思う学生、

そんな講義を私は心がけています。

一〇〇パーセント「わからない」で

は教育者失格ですが、一〇〇パーセ

ント「いいね」の状態は先を見てい

ないということ。

大澤 一〇〇パーセント「いいね」は、

全員がすでに知っているということ

ですものね。進歩がない。

樋野 新渡戸稲造の第一高等学校で

の授業は、半分は「いいね」、半分

は「わけがわからない」だったそう

ですよ。「いいね」側のなかに南原

繁と矢内原忠雄がいた。「わからない」

側の人たちは歴史に残っていない。

大澤 フェイスブックに「いいね」

ボタンがありますね。人々は自分の

身辺雑記なり意見なりに「いいね」

がたくさんつくことを望んでいる。

つくと満足、つかないと不安。「い

いね」と言つてほしくてたまらない

社会。スルーされたり「わからない」

と言われたりするとすぐに傷つく。

樋野 フェイスブック症候群ですね。

大澤 承認欲求を充足させる場が欠

落しているんでしょう。承認欲とい

うか、ただ話を聞いてほしい。それ

だけ。しかし、「それだけ」が調達

しにくい社会構造になっている。

樋野 自分に関心をもつてくれてい

る人が存在するという当たり前の確

信を失いつつありますね。

大澤 それで、ネット上の誰だかわ

からない人間の「いいね」や「お気

に入り」を数として求めてしまふ。

もちろん、そういうメディアが誕生

したことによって転倒的に派生する

欲求でもあるわけですけど。

樋野 社会の劣化ですね。歴史を見

るとわかる。

大澤 がん患者の場合は条件がさら

に込み入ってきますね。というのも、

罹患以前には相談できたなんでもな

い話題が、がんというファクターが

一つ入ることによって相談できなく

なりますから。家族や身近な人間だ

からこそという面もあるんでしよう。そこでこぼれ落ちた言葉たちを掬い上げる場がこれまではなかった。

樋野 がん哲学外来を開始してわかったことなんですが、日本人は冷たい親族に悩んでいます。だから、温かい他人を求めます。

大澤 近くの冷たい親族よりも、遠くの温かい他人……。もちろん、結果として「冷たい」状態になつていくわけですよ。

樋野 ええ、家族に病人がいる状況に慣れていないものだから。同じ空間での付き合い方がわからず、会話で傷つけてしまう。病気になる人を見る目が敏感になります。今までもなんとも思わなかったことが急に気になります。

大澤 相手の状況に自分を適度に調律させる必要があるんですね。

樋野 だから、がん哲学外来がここまで発展したんだと思います。

場の設計について

大澤 対話をラフな状態で実現する



ひの おきお 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授。1954年、島根県生まれ。米フォックスチェースがんセンター、がん研究会がん研究所実験病理部部長などを経て現職。2005年、順天堂医院に「アスペクト・中皮腫外来」を立ち上げたことがきっかけとなり、08年に同院内に無料の「がん哲学外来」を創設。『がん哲学外来へようこそ』（新潮新書）など著書多数。

家族にもいい。

大澤 先生と患者の対話を家族が横で聞いていて、「そんなこと考えていたのか」と気づきを得る場面が、著書のなかで描写されていきましたね。

樋野 家族と一緒だと、家に帰って相談してくだ

さいと言えますしね。

大澤 たとえ温かい家族がいたとしても、それまでと相対関係が変わってしまつて、どこか照れくささが拭えない。そこで、「ここは相談する場ですよ」とシチュエーションを与えられると相談しやすい。そのため「場」の設定もがん哲学外来の大きな目的の一つなのでしょう。

樋野 場は大切です。全員の心がひらくような場を作らないと。

大澤 そのための「お茶」ですね。

樋野 そう。場を保つにはお茶。

大澤 お茶以外には何か。

樋野 お茶で十分。

大澤 お茶は無言になったときに飲むんですか。

から相手が見えなくなるときの。まあ、話すことなんてそんなにないから。一五分程度なら話せるけど、六〇分というのは大変ですよ。

大澤 六〇分もやるんですか！

樋野 今日、ここに来る前には九〇分くらいやりましたよ。

大澤 何時までという区切りは事前に設定されるんですか。

樋野 枠があつて、患者も次の人がいることを知っています。時間になったら、次の方が待っていますとスタッフが言う。

大澤 一つの枠の時間はどのくらいなんですか。

樋野 たくさんの方がいらしたら、一人二〇分程度になります。三分、六〇分、九〇分とそれはもうばらばらですね。だいたい六〇分くらい話すと終わります。

大澤 一般の病院の外来だと三分なんてざらですよ。

樋野 だから、病院ではできないんですよ。そんな時間の余裕なんてない。病院の外、街なかがいい。

大澤 先生とのマンツーマンだけではなくて、グループセッションもあるんですよ。先生もテーブルに参



おおさわ さとし 批評家。近畿大学
文学部准教授。1978年、広島県生
まれ。各種媒体にジャーナリズムや文芸
に関する論考を発表。著書に『批評メ
ディア論』（岩波書店）などがある。

加されるんですか。

樋野 はい。スタッフが進行役です。
大澤 ファシリテーションが上手い
のはどういう人でしょう。

樋野 相手に共感できる人ですね。
共感がないと傷つけてしまうことが
ある。聖書の「愛をことさらに起す
なかれ」ですね。みんなすぐアドバ
イスしようとするけれど、共感がな
いままアドバイスしてもダメ。

大澤 しかし、とうてい共感できな
い話もありますよね。その場合はど
うしましょう。

樋野 正論より配慮。相手が間違っ
ていても認めることが重要です。自
分が負けたように感じるかもしれない。
でも、そこで競争しているから、
つい正論を吐いてしまふんです。自
分の気持ちで接しないことです。そ

して、相手の必要に共感する。

大澤 なるほど。「必要」に共感。
樋野 そして、患者たちが苦痛にな
らないようスタッフで上手く回す。

大澤 聞くだけで心の平穏を獲得し
ていて、むしろしゃべりたくない人
がいる。他方、たくさんしゃべること
で安心したい人もいます。とはいえ、
後者にばかり話させるわけにもいか
ない。これは大学のゼミを運営して
いても感じることです。

樋野 どの現場でもファシリテータ
ーの存在と力量が重要ですね。ただ、
これも学習と訓練で補えるものです。
これからはファシリテーター教育が
必要になるでしょうね。

「対話学」の可能性

大澤 そうしたトレーニングの機会
は将来医者となる医学部生の
授業科目に組み込まれている
んでしょうか。

樋野 いや、医学部も看護学
部も薬学部も「対話学」のカ
リキュラムがないんです。だ
から対話に慣れていない。私
の言う「対話」は、たとえば
三〇分間沈黙でもお互いに苦

痛にならない関係性のことです。そ
ういう人間訓練の場がない。

大澤 これまでの医療教育のプロダ
ラムには、コミュニケーションの重
要性に気づきつきかけがなかなか
なかったと。

樋野 模擬患者を導入することはあ
りますよ。でも、真剣みに欠けます。
苦しんでいる人たちと同じテーブル
に座って、一時間相手が苦痛になら
ず、帰るときには少し笑顔になっ
ている。そのためにはどう振る舞った
らいいか。医療者に限らず、あらゆる
領域に応用がきくモデルです。

大澤 がん哲学外来の構想が立ち上
がった二〇〇〇年代半ば、教育学の
方面で本田由紀さんが「ハイパー・
メリトクラシー」という用語で現代
社会を批判的に分析したことがあり
ました。個人を評価する対象が、勉
学に支えられた近代型の能力から、
「コミュニケーション能力」や「人
間力」といった定義や測定基準が曖
昧な能力へとシフトしたことを実証
的に示したものです。

樋野 ええ。
大澤 彼女の処方箋は専門性を磨く
方向へと社会を導くものでしたが、

オブションとしては、やはり小学校
なり中学校なりのカリキュラムに
「対話学」に類するものが組み入れ
られてもよさそうですね。

樋野 実際、小・中・高での「がん
教育」の試行もはじまっています。
大澤 文科省によって、二〇一四年
から「がんの教育総合支援事業」が
実施されています。

樋野 いまは限定的ですが、来年度
からは全国展開です。
大澤 男子校から進学した学生が女
子との接し方で躓くという弊害はし
ばしば指摘されるところです。今年
のエイプリルフールのネット上のネ
タに東大が「男子校コミュニケーション
初級」という授業を開講するとい
うものがありました。これは冗談
でしたが、類似した講義は現実に全
国の大学が増えつつある。それだけ
対話能力が不確かなものになりつつ
ある。少なくともそういう危機感が
醸成されている。

樋野 選択科目でもいいから、大学
の講義に「対話学」を設置すべきだ
と私は思いますね。
大澤 文理融合の一例としてありう
る選択肢です。評価をどうするか

〔注〕ファシリテーション会議などがスムーズに進むように中立的な立場で支援すること。

ど工夫が必要でしょうけど。ちなみに、大学の樋野先生の講義はどんな雰囲気なんですか。

樋野 みんな寝てるね(笑)。私の話は睡魔を誘うから。集団だと真剣みがない。それが一対一になると目が輝く。がん哲学と同じですね。

大澤 同一人物が同一内容を話しているも、条件によって受け取られ方が異なる。一対一という形式のもつ意味があるわけですね。

樋野 フェイス・トウ・フェイスでお互いに目を見ることが大事。コンピュータを触ったりカルテに文字を書いたりしながらではダメ。一〇〇人の目を見ることができませんが、一人ならできる。

「対話」と「会話」

大澤 こうやって実際に対話させていたとくと、患者さんが安心する理由もわかってきました。先生の声のトーンも関係していそうですね。

樋野 まあ、何を言っているかわからないから(笑)。

大澤 いやいや、落ち着いたテンポで明晰にお話しになるので、一つ一つしっかり入ってきます。僕は現

代っ子の典型というか、少し早口になってしまふ。それは相手を警戒させることにつながるのかもしれない。競争のリズムというか。

樋野 私は出雲出身だから。ステイボーイだったら早口だったかもしれない。何がよい方向に運ぶかわからないものですね。昔は出雲弁が恥ずかしくって……。人前で話すのが嫌だった。

大澤 人の話をゆっくり聞くリズムが生来備わってらっしゃる。

樋野 自分の優先順位を下げて、困っている人を中心に考える。できないなら、訓練が必要でしょう。

大澤 医学生はみんな競争に勝ってきた存在なので、どこか言い負かす姿勢が染み込んでしまっている。

樋野 人と比較しないことね。それが対話のポイントです。

大澤 あらためて先生にとつて「対話」とはなんでしょう。「会話」との差異で考えるところ少し見えてくるのではないかと思います。

樋野 会話は言葉によって成立するものですね。だから人間同士。対話は心と心の問題。動物と人間のあいだでも成立する。これが対話と会話

の違いではないでしょうか。ふつうは会話でいい。けれど、その言葉で傷つく人がたくさんいます。人間は猫や犬に癒される。病院にもファシリテイドッグやセラピードッグがいます。犬は言葉を発しません。そばに在るだけ。それでも慰められる。これが対話でしょう。

大澤 対面の重要性でしょうか。

樋野 心と心が触れ合うことですね。相談もカウンセリングもスピリチュアルなケアも、すべて言葉によって行われます。時間が限定されているから何か話さないといけない。沈黙ではなくて言葉。だから、ときに傷つけてしまふ。

大澤 言葉で時間と空間を埋めつくしてしまふわけですね。

樋野 そうそう。沈黙は大変なことですよ。三分間でも長い。

大澤 想像するだけでも、耐えられそうにない……。

樋野 けれど、それをやると、どこにも話していなかったことを話してくれる。必ずです。それは井戸の水を汲み上げる作業のようなもの。がん哲学外来に訪れた患者や家族はたいてい涙を流すんですよ。

大澤 ある種のカタルシス効果がともなっているんでしょうね。

樋野 泣いて、あとは笑う。

大澤 ノンバーバルコミュニケーションの位相が重要なんでしょう。表情やしぐさ、視線、声のトーン、共有する場の空気。沈黙もそう。今こうやって収録している対談の音源が文字になるわけですが、再現されるのは発声された言葉だけです。でも実際には、手ぶり身ぶり、笑い、独特の間などが存在している。お茶も飲む(笑)。その部分も全部まるっと含めて対話なんですよね。

樋野 本当にそうですね。対話と会話の相異を意識し直すべきです。アメリカでは沈黙の世界に慣れていないから言葉によってしか理解できない。そのように訓練されてもいる。しかし、日本では言葉がなくとも、心と心でわかりあえるものだという文化があったはずでしょう。

大澤 日本の対話文化が西洋化しているということはあるでしょうね。

樋野 それも中途半端な西洋化です。大澤 「沈黙」なり「無」なり「間」なりの価値や意味を解釈し直すことが必要な時期にきているのでしょうか。

言葉で埋めつくさない

大澤 聡

相手が発話に詰まったり口ごもったりする。そのたびに、文脈を付度しては言葉を継いでしまう。そんなくせをもつ人は多いんじゃないだろうか。まず僕がそう。

話し相手は「そうそう」とか「それで……」とか「つていうのも」とか一言挟んだのちに話を再開するわけだけれど、本当に「そう」「それ」「つていうの」だったのかはちよつとあやしい。数秒なり数十秒なり待つていれば何かしらの言葉が本人の口から搾り出されたにちがいないのだし、それがこちらの補った言葉と寸分たがわず一致するなんてことがあろうはずもなく、それどころか正反対の内容だったかもしれない。けれど、どれだけズレていたとしても「いやそうじゃなくて……」とひっくり返すケースはまれだ。せつ

くの付度を棄却するには多少なりともパワーを要するということなのか、日常会話なんて深く考えていられないということなのか、いずれにせよ、たいていは場の流れに接木するかたちで次の言葉が選択され、対話が連鎖していく。本来の言葉は中絶させられる。

僕の場合、学生を指導している最中にもついでこのくせが出てしまうから自分で嫌になる——学生は乗そうだけだ。やっぱり沈黙で通さないといけないところなのだろう。でも沈黙は苦手だ。ひどい場合には、早々に沈黙の到来を予期して相手の発言を遮つてまで整理してしまふから、いつそうちが悪い。樋野さんは沈黙していられる関係の構築の重要性を強調していた。「お茶」もそれをアシストする道具の一つらしい。

二〇世紀ドイッを代表する思想家、ヴァルター・ベンヤミンは、最初期のエッセイ「若さの形而上学」（一九一三年）のなかでこんなことを書

いている。

対話がめざすのは沈黙であり、そこでは聞き手は、聞くというよりむしろ沈黙する者である。意味を受け取るのは、むしろ語り手のほうであつて、沈黙する聞き手こそ、汲めども尽きぬ意味の泉に他ならない。

樋野さんが対談中に使った「井戸の水を汲み上げる作業」といったイメージとどこか呼応していて面白いのだけれど、それは措いておく。ともかくにも、ベンヤミンは対話の理念型を「沈黙」に見た。そして、「問い」／「答え」を事前にすっかり掌握した問う者について、「おのれ自身しか見ようと思せず、おのれ自身しか聞こうとしない」と形容している。それは「対話」にあらずといたいのだろう。「見つめる者、耳を傾ける者を意のままに支配」しているにすぎない、と（ちなみに、このくだりはそ

うと言明せぬままソクラテス批判に なっている）。相手の言葉を先取し たり、勝手に補完したりする者もそ こでは批判の対象に含まれるはずだ。

樋野さんはがん哲学外来で「何を話していいのかわかかっていない」という。謙遜ではなくて実際にそうらしい。「わからない」が「沈黙」へと導く。そして、「わからない」は長い対話時間の確保という条件からきている（数分なら間がもつのだから）。カットされた部分の会話で、樋野さんは「暇そうにしている」ことの重要性も強調していた。精神分析家のジャック・ラカンは「短時間セッション」を導入したことで知られるが、それは乱暴につなげてしまふと、ベンヤミンのいう「支配」を回避するための方策でもあつた。それでいうと、樋野さんのスタイルはラカンと対極の長時間設定でありながらも、同時に、決して「支配」しない関係を追求した結果といえるんじゃないだろうか。